

センター つゆん

NO.72



歩く大人でありたいと思うのです。しかし、今現在の生活が楽しく充実していることの上にごそ、子どもの将来が切り拓かれていくのではないのでしょうか？今、子どもが何を感ず何を求めているのか、そこに寄り添い一緒に

保育園の夏の終わり、4・5歳児は蔵王に合宿に行きます。蔵王合宿では、沢でにじますを捕まえその場で捌いて塩焼きにして食べるという活動を行います。獲物を捕獲する歓喜が一瞬、魚の白い腹に小刀が走る段になると、眉間に深いしわが刻まれ手が震えます。でも、「どうやって水の中で息しているんだろう？」「魚の腰の辺りは虹色だった。」「にじますの命をもらった。どきどきした。」「けど、すんごく面白かった。」と、その後を描いた絵の中には、にじますの虹色の模様や、獲物を掴み取った自分の大きな手や、応援するたくさんさんの仲間の姿が躍動しています。学年が進むごとに勉強嫌いが増え、学びから遠ざかる子どもたち。降り注ぐ評価のまなざしに傷つき、自分を肯定できず居場所を見出せず苦しむ子どもたち。一方、幼児期から将来のためにと先回りして身につけさせよう、覚えさせようという前のめりの傾向も強まっています。

安達喜美子（センター運営委員）

ひと言 ひときどきしたけどすんごく面白かった

目次

ひと言	安達喜美子	1
特集 3・11、2年半後の今考えること		
出会えてよかったと思い合いたい	鎌田 雅子	2
心のケアから指導へ	徳水 博志	4
本当に笑える環境をつくってあげたい	吉長 牧子	6
もう一度、情熱を	菊田 浩文	8
東日本大震災、石巻における被災校のその後	渡辺 孝之	10
はじめての新高校入試制度が実施されて思う		
どこか違う世界のように	矢部 英寿	12
希望のもてる入試制度に	高橋 智穂	12
中学3年生の子どもたち	結城奈津子	13
高校入試を終えて	一保護者	13
新入試制度への疑問	佐藤 隆	14
福田誠治 教育講演会報告		
テストなし、競争なしでも「学力世界一」	清岡 修	15
報告 フォーラム「子どもの今と未来を考える」		
PARTIV「部活」を語ろう、考えよう！	須藤 道子	17
わたしの出会った先生 4		
柴田平三郎教授	前谷津 剛	19
戦後教育実践書を読む会の報告		
『人間づくりの学級記録』（宮崎典男 著）		
の読み合いを終えて	佐々木 敦	20
教室の報告		
ああ！1年生？あ〜あ1年生？ドタバタ日記	藤原 聡	22
本の紹介「文学作品の読みの授業」		24
センターの動き		24

特集

3・11、2年半後の今考えること

早いものです、あの日から2年半になります。被災地の向こうはなかなか見えませんが、そんななかで子どもも教師も懸命です。

被災地に限らず、3・11は、私たちに生き方の問い直しを迫ったものではなかったかと思えます。ですから、海岸線に高い防潮堤をつくるなどということは、少しも変わる気はありませんという、自然に対する私たち人間の不まじめな宣言のように私には響きます。そんなことではないはずと形に見えなくとも私たちの何かがかわらなければなりません。

3・11後の自分をお互いに出し合うことで、これからの私たちの生き方をみんなで考え合いたいという目的での特集になります。次号以降もつづけたいと考えています。

(かすが)

出会えてよかったと思いたい

鎌田雅子

夏休みのはじめに、春日先生から「センターつうしん」への寄稿のお願いをいただきました。

「3・11が教師である鎌田さんに残したものは何か。3・11をくぐることによって、今どんなことを考えながら仕事をしているかを知りたいのです。」という一文にドキッとしました。

日々、目の前の仕事に追われるようにして過ごしていると、2年半はあっという間に過ぎてしまったように感じます。あの経験によって、教師としての私の中で変わったことって何だろう……。夏休みの間ずっとそのことを考えていました。

私は、震災後も職場が変わることなく、門脇小学校で勤務しています。震災前は300人ほどいた児童数も、今は半分に減ってしまいました。

津波の襲来によって学区のほとんどが壊滅的な被害を受けました。家、親、兄弟、……大切なものを失ってしまった子どもが多
くいます。(もし私がこの子の立場だったら……)と想像するのも怖くなるほどつらい体験をした子どももいます。

それでも、子どもたちは学校に来ると教室で笑顔を見せてくれました。震災後すぐに担任した5年生の子どもたちもそうでした。
「先生、震災の時はこんなに大変だったんですよ。」

パンと牛乳の給食を食べながら、当時のことをずいぶん語ってくれました。

放課後になるといつも決まって教室に残る女の子たちもいました。クラスの男の子のこと、好きなアイドルのこと、家族のこと……いろいろな聞かせてくれました。喋るだけでは足りないのか「先生、交換日記してください。」と、日記で悩みも打ち明けてくれました。

当時は1学期いっぱい、中学校の校舎が避難所でもあったため、「さようなら」をすると体育館に帰る子どももいました。これから住む家のこと、親の仕事のこと、自分の将来のことを考えないことはなかったでしょう。どれだけ不安な気持ちでいたか想像が付きません。夜は眠れているかな、不安な気持ちを誰かに打ち明けることができているのかな、この子どもたちの担任として自分に何ができるかな……。ずっとそんなことを考えながら、その時できる精いっぱいのことをして過ごしてきたように思います。

あれから2年。今年度は1年生を担当しています。入学したのは12名でした。その全員が、上の学年もしくは門脇中学校に兄弟のいる子どもたちです。学校の統合の話もだいぶ前から出てはいますが、門脇小学校が今後いつどうなるのか、未だ決定していません。そのような状況の中で入学してきた12名の子どもたちです。

この子どもたちとの出会いは一期一会だなと思うのです。(この仲間と出会えてよかった。このクラスで学べてよかった。)と心から思える学級を作りたい、そんな人間関係を築けるように子どもたちに寄り添いたい。こんなことを思いながら子どもたちと向き合っています。

人との比較でなく前の自分と比べてどう成長したかを見てくれる・認めてくれる仲間がいて、その仲間と本気になって語り合い新しい見方や考え方に出会い、その仲間と一つのを創りあげる喜びを味わい、そしてみんなで成長を実感し合う。そのような経験をさせてやれたらなと思うのです。



(石巻市・門脇小)

心のケアから指導へ ― 震災体験の対象化 ―

徳水 博志

震災一年目は、自宅流失や義母達の死亡、居住地の雄勝町の壊滅という現実を目のあたりにして、被災地に必要な学力とは果たしてグローバルな経済競争を勝ち抜くための生きる力Ⅱ「競争の学力」なのだろうかという素朴な疑問を抱きました。被災地には被災地の復興に貢献するための学校づくり（独自の子ども観・学力観・学校経営観）が必要ではないかと考えて、二〇一二年六月に学校長と全職員に提案したものが、『震災復興教育を中心にした学校運営（経営）案』（センター通信64号掲載）です。この提案を受けて学校長は二期から「郷土愛と逞しさを育てる復興教育」を学校経営案に追加しました。その《復興教育》の柱は、『地域復興を学ぶ総合学習』です。この実践については、二〇一二年二月から三回連載の『宮城県教育新聞』（宮教組発行）や『東日本大震災教職員が語る子ども・いのち・未来』（二〇一二年明石書店）において報告しました。

今回は震災二年目の実践を紹介します。震災二年目は5年生を担任しました。一年目の6年生と同様に5年生の子ども達も《地域復興を学ぶ総合学習》には意欲的に参加しましたが、「学力向上」を目指す教科学習には全く意欲を示しませんでした。特に思考を要する授業には「考える頭が痛くなる！」と叫んで拒否反応を示しました。そのわけは震災から受けた心の傷が大きくて、前を向く気力が失われたからだと思います。5年生は全員が自宅を流されました。子ども達の喪失感は大きく、前を向く気力はなかなか生まれません。今のままでは震災体験はただのマイナス体験です。千年に一回の体験から何かを学び、プラスに転じることが必要ではないかと考えました。そのため新しい教育実践の必要性を感じました。その実践とは子どもの苦悩そのものを教材化すること、子どもに寄り添って心の不安や叫びを聞き取り、受け止め、表現させ、乗り越えさせることではないか。これを《震災体験の教材化》と名付けました。そして、五つの実践を構想しました。その中の一つ、『自分の震災体験を対象化する実践』を報告します。

実践の構成は、①九月：震災体験の俳句と作文、②一〇月：震災体験の朗読劇（学習発表会）、③十一月：震災体験の時系列による絵本制作、④十二月：ジオラマ制作、⑤二月：木版画「希望の船」の共同制作です。

九月の震災体験の俳句と作文では、導入部で震災体験を詠んだ小野智美著『女川一中生・あの日から』を紹介して、子どもの反



応を見ました。震災の悲劇を詠んだ作品への拒否反応は特に見られなかったので、自分の震災体験を五七五調で表現させました。その後に本格的に震災体験の作文に挑ませました。一年半ぶりに震災の記憶と向き合うことは辛かったことですが、学級の仲間がお互いに聞き役になつてくれました。子ども達は記憶を確かめ合い、語り合いながら震災の記憶を想起して書きました。

すると、作文には私達教師が知らなかった事実がたくさん書かれていて、強い衝撃を受けました。自宅に忘れた犬を助けに帰り、津波に追いかけて九死に一生を得た子、高台から故郷の街並みが流される様を見て恐怖を感じた子、巨大地震の揺れに難を逃れた後に聞こえてきた大津波警報のサイレンに「次は死んだ！」と死を恐れた子、親と離れ離れになり親の死を覚悟した子など、その震災体験は想像以上に過酷で辛い内容でした。一方で家族が一番大切と再認識したこと、避難所で触れた人の心の優しさ、みんなのために避難所で働くリーダー役の大人への尊敬の念など、人間を肯定する内容も書かれていました。その作文は学級で読み合つて交流しました。そして一〇月の学習発表会では、震災体験の作文を使って故郷の復興を祈る朗読劇を発表しました。

ところで、このような実践に対しては、子どもの心の傷口を広げるのではないかと危惧する声があります。この点を踏まえて、本実践では名取市閑上で被災児のケアを行っている心療内科医・桑山紀彦先生の助言をもらつて進めました。桑山先生のケアは「心理社会的ケアワークショップ」と呼ばれていますが、それを閑上に学びに行き、また桑山先生には私の教室に来てもらつて助言をいただき、学校教

震災の夜の美しい星空

津波に襲われる雄勝小学校校舎

未来に向かって船で進む子ども達

復興した町と笑顔の家族



高台から見ている町の人達

たき火にあたる被災者

救援に来た自衛隊

復活した獅子舞

復活したホタテ養殖

復活した雄勝法印神楽

共同制作『希望の船』2012年度 石巻市立雄勝小学校5年生制作

育で応用できる部分を図工と総合的な学習の時間で実践しました。それが時系列の絵本制作とジオラマの制作です。そして二月、《震災体験の対象化》と《地域復興を学ぶ総合学習》のまとめとして、木版画『希望の船』の共同制作を行いました。最後の七海さんの感想文をお読みください。

七海さんは、版画制作によって震災の記憶を白黒の形象にして心に刻み付け、震災を後世に語り継いでいく強い決意と前を向き力強く歩む決意を述べています。震災の記憶を対象化することで意味づけが始まり、前を向くことができたのです。このように、子ども達は自分の恐怖体験や喪失感を言葉や絵画で表現することを通して、辛い記憶と向き合い、それを受容して心を整理し、意味付けることで前を向くことができます。それが震災体験を対象化する教育実践の価値ではないかと考えます。

希望の船をつくった感想

五年 七海

あの三・一一の暗い出来事と明るい未来の事を、そして船を彫りました。私達が体験した三・一一からにげずに、前へ進んで行くという思いで、この共同制作の版画にいじりました。後世に伝えて行かなくてはならないこの事を版画にして、何年後、何十年後と時がたっても、この版画を見て、思い出してもらおうことや、後世に伝えていくことができるのではないのでしょうか。そして、私達もわすれかけている時に版画を見て、その震災を思い出せると思います。私はこの共同制作『希望の船』を制作してよかったなあと 생각합니다。私はもう転校しますが、転校した学校でできた友達にも、この『希望の船』のことを教えようと思います。私の大切な思い出です。

(2013年3月21日 記)

(石巻市・雄勝小)

本当に笑える環境をつくってあげたい 吉長 牧子

5年前、私が東六郷小学校に赴任したとき、田んぼや畑に囲まれた自然豊かなところに2階建てのかわいらしい校舎は建っていました。昭和のよき時代にタイムスリップしたかのようなそんな錯覚すら覚えた。

2011年3月11日、そんなのどかで平和な東六郷地区に突然襲った地震と津波。私たちは大事な物全てをたった一瞬で失ってしまったのだ。……目の前の悲惨な現実を直視しながらも、それを受け止められずまるで映画を見ているかのような感じがあれ



らずとずっと続いてきた。

震災から何日かたって、学校が再開したとき子どもたちはとても元気だった。いや元気そうにしていた。よっぽど学校が始まったことが嬉しかったのだろう。私たち職員もやることは山ほどあったが、不思議なもので何とかそれをこなし、学校は始まった。職員一人一人みんなが同じ方向を見て、少ない人数ながらも協力し取り組むようになったのだ。子どもたちのためにできるだけのことをしてあげたいという思いがそうさせたのだと思う。

六郷中学校に間借りさせていただき、新入生も5名無事に迎えることもできた。本校舎にいたときと比べると確かに大変なことや不便なことも両手に余るほどあったが、「東六郷小学校」として再びスタートできたことは児童・保護者・地域の方々・教職員にとつてこの上ない喜びだったのだ。だから一つの教室を2学年で使うことや思うように特別教室などを使えないことにも何の不満を持つこともなく、逆にありがたさでいっぱいだったのだと思う。六郷中学校の先生や職員の方々、中学生に、そして国内外の支援してくださった方々にどれだけ支えられたことか……。

そして、あれから2年5ヶ月たった今、我々の現状はあの日からどれくらい変わってきたのだろうか？

と考えてみる。合わせて28名の卒業生を送り出し、児童はそれぞれ進級し、1年生を3回迎えた。しかし、一昨年度は5名、昨年度は2名（うち1名は特別支援）、今年度はたった1名の1年生。児童数はなんと26名になってしまった。私が赴任する前年度出ていた統合の話も震災を機に再び持ち上がったことはいままでもない。人数が減少してきたという理由に加えて、地域に住民（子ども達）がもどつてこない、校舎が使えないという大きな要因が重くのしかかってきたのだ。

自然に囲まれ児童を伸び伸びと育てることができたはずの校舎は今、ただ悲惨な姿でそのまま残っているだけなのだ。地域の方が花壇にきれいな花を植えてください、モノトーンの世界にそこだけが浮き上がっているのを見ると涙が出る。広々とした校庭にも元気な子ども達の声はこれからもずっと戻らないのだろうか。

年々減りつつある児童数、住んでいた元の場所に新築あるいは修理しもどる家庭がある反面、六郷小学校学区に家を建て始めた家庭も少しずつ増えつつある現状。いつまで間借りを続けているのか、いつたいていの先学校はどうなっていくのか、全くわからない。そんな中で特に未就学児を持つ親は、ゆつくり考える時間もない中、否が応でも結論を迫られているのだ。

今年度は、姉が東六郷小に在籍していながら、妹は近隣の小学校に入学させたというケースも出てしまった。姉妹を違う学校に入れざるを得なかった保護者の方の気持ちを考えていたたまれない思いでいっぱいになる。転校を拒む姉。しかし、今後近い将来統合するかもしれないのであれば、最初から妹は統合先の学校に入れた方がいい。その結果だ。もう一人は、兄が在籍しているためたった一人の1年生として入学させたケースだ。しかしこの結論を出すまで、どんなに悩んだことか、想像がつく。これも全



て震災がもたらしたもののなのだ。在校生に、統合を望む児童はいない。少数でずっと過ごしてきた児童にとって、震災を経験した児童にとって新しい環境に飛び込んでいくことは難しいことなのかもしれない。そういう意味で、5年前の統合とは意味の全く違う統合の話なのだと思う。

私たちが今できること。震災を経験し怖い思いをした子どもたちの心のケアはいうまでもない。震災前の子どもたちをよく知っている私たちが、ちょっとした変化も見逃してはならないのだ。元氣そうに見えていても、あの日の記憶は消し、ゼロにすることはできないのだから。ましてや家族を亡くした児童は、より一層の心配りが必要だ。震災当時の職員も少しずつ減ってきている。いくら心配であっても、ずっとその子のそばにいて見守ってやることはできないのだから、自分で何とかがんばる力と困難に耐えうる強い気持ちを持てるようにしてあげなければならぬのである。それが我々教職員の務めである。今日も26人の子ども達は、汗だくになりながら運動会の練習に一生懸命励んでいる。

この子たちに心のそこから本当に笑える環境を作ってあげることが我々大人の使命なのだと思う。一日も早くそんな日が来ることを切に願う。震災後、学校現場に本当の意味の前進はあったのだろうか……。2年5か月毎日そんなことを考えている自分がいる。

(仙台市・東六郷小)

もう一度、情熱を

菊田 浩文

あれから2年半変わったことは、涙が零れるようになったということ。今はちょっとしたことでも目頭が熱くなるようになりました。これまで当分の間、涙が流れることがなかったからこれはきつと良いことなんだろうと思います。そんな反面、少し前までは、生徒の前で笑顔を見せながらも、今の自分は「何をしているのだろう」。そんな思いの葛藤ばかりが続いていたというのが正直なところです。

震災当時は、必死に何かをしなければという思いのなかで、何をすべきかが見えていたつもりでした。そう、「何ができるんだろう」と常に考えていたように思います。

そして、じかん月日が経てば今よりもっと何かができていだろうと思っていました。

しかし、学校環境と生活が徐々に落ち着きを取り戻していく中で、自分のまわりの状況を客観的に見られるようになってくると、



逆に自分は何をしているのかが、自分自身ですら分からなくなることはありません。心身のアンバランスからか、何かを見失っているような感じがしていました。このような思いの中で、この原稿を引き受けたことを実は後悔していました。こんな気持ちで書く内容を考えると、尚更ペンが進みませんでした。無責任でした。

何かに絶望しているわけではありませんが、もつと前向きであることを想像していたはずなのに、もつと充実したものになっていくもののだと思っていたはずなのに、現実とは違っていました。張り詰めた思いで卒業生を見送っていくたびに、安堵感とともに出てくる虚無感のようなものを自分自身、想像していませんでした……。

このような思いになるというのは、年齢のせいなのか、震災後の影響があるかないかは分かりませんが、私の現実なのです。そんな自分を何とか奮い起こして仕事をこなす日々が続いていました。あの時期から私は「頑張り過ぎず、手を抜かず」を心でつぶやくようになっていました。しかし、そんなときでも、変わらなかつたことは、学校生活の中で、生徒と接することでエネルギーをもらっているということ。自分を奮い立たせるエネルギー。自分に必要な「情熱」というエネルギーの源をもらっていることに変わりはありませんでした。そんなあるとき、ふつと私は、若い時に海外派遣教員としてタイの日本人学校を訪問したときのことを思い出しました。その参観した学級の黒板の上には、次の言葉が書いてありました。

ただいるだけで

あなたがそこに ただいるだけで

その場の空気が あかるくなる

あなたがそこに ただいるだけで

みんなのところが やすらぐ

そんな あなたにわたしも

なりたい

授業を聞くよりもこの言葉を書き写すことに必死になったことを思い出しました。

恥ずかしながら当時の私は、相田みつおのことは知りませんでした。強く心に響いたことを憶えています。今、私は改めてこんな人間でありたいと強く感じています。

そのためにも、自分の心にゆとりを持ち、本当の自然体でこうなりたいと思います。

そして、もう一度、心から子どもたちと熱く語れる教師になりたいのです。



東日本大震災、石巻における被災校のその後

渡辺孝之

東日本大震災から2年、被災した学校の近況について、私の知りうる範囲で報告したい。

今年3月末、被災校では大きな動きがあった。東日本大震災で被災した石巻管内の14校（小9校、中5校、谷川小は23年度末）が閉校し、新たな統合校としてスタートした。（次ページ表参照）

学校統廃合は、学校に通う子どもにとつても、保護者・地域住民にとつても重要な問題であることから十分に時間をかけて検討されるべき課題である。しかし、今回の統廃合は極めて短期間のうちに検討が行われ結論が出された。それは、被災した大半の学校が元の校舎を失い、間借りを余儀なくされていたことによる。間借りの解消が速やかに進むのであれば、統廃合を急ぐ必要はなかったが、校舎を失った学校を再建するためには大きな困難があった。最大の課題は「用地の確保」。津波が押し寄せた校地に学校を再び建てるわけにはいかず、高台に校地を求めなければならない。しかし、沿岸部で学校が建設できるような面積を持つ高台に用地を確保することは難しかった。用地を求めても山を削って造成には数年を要する。

実際に、被災後、高台に移転して校舎を建設した例は石巻には1校もない。例えば、東松島市では、野蒜小（宮戸小と統合して仮称「鳴瀬二小」となる予定）と鳴瀬未来中の2校の新校舎建設を計画しているが、校舎竣工は平成29年4月とされている。震災から6年経過することになる。鳴瀬桜華小の新校舎竣工は平成34年、震災から11年後となっている。

予算についてふれた。震災後の国の動きは決して素早いとは言えなかった。被災した校舎を建設するための予算が平成23年第3次補正予算で確保されたのは、11月になってからであった。災害によつて壊れた学校の再建には「原形復旧」という原則がある。元の場所に同じ建物を建てるという考え方である。しかし、津波が襲った場所に同じように建設するということは考えられない。国では第3次補正予算の成立に合わせて、移転を認め用地造成費用も含めて国が補助できるような法整備を行った。これで、激甚災害指定を適用すると建設費用の95%を国が補助できることになったのである。ところが、こうした情報は震災後の混乱した状況の中で多くの人に伝えられることはなく、統廃合の議論にも生かされることはほとんどなかった。多くの人が学校建設には相応の自治体負担が伴うと考えた。

学校の間借りというのは、子どもたちにとつて決してよい環境ではない。新校舎建設に数年を要するとなれば、間借りが長期化せざるを得ない。間借り解消のためには学校統合という選択をせざるを得なかった。

さて、統合後も教育条件上、大きな課題が残っている。震災後、震災加配等教員の加配が行われ、学校復旧・復興、子どもたち

の心のケアに対応してきた。この配置の継続が目下最大の要求である。石巻管内で先に統合した谷川小・大原小はどちらも複式2学級を含む4学級の学校であったが、統合後1年間は6学級となった。しかし統合2年目は再び複式3学級になってしまった。同様の事態が統合した学校で起きないか危惧する。教員の加配によって4人以上学級でも2学級とすることができるようになった。比較的規模の小さい学校で、20人程度の単学級が統合によって40人近い学級になったのでは、父母・住民の理解を得るのは難しい。現在国は宮城県に200名を超える教員加配措置を行っている。これを臨時の加配とするのではなく、恒常的な定数改善にぜひしてほしい。

表には震災前と現在の児童生徒数の比較を記しておいた。どの学校でも児童生徒数は減少している。様々な理由で、被災後、母校からの転出を余儀なくされた子どもたちが大勢いることを示している。その子どもたちが、転出先で十分な支援と心のケアが受けられているのか、案じられる。震災後の労苦を共にした人が身近にいればその悩みも共有できる。その悩みを共有できずに胸の内に抱えてしまっている子どもはいないか。被災は県内外に拡散している。

震災から学校・子どもたちを守ってくれたのは「地域」であった。当たり前のようであったその「地域」が今回の震災で学校から失われる事態に私は遭遇した。今、地域の再建を議論する中で学校の大切さを指摘する声が出される。学校があれば、そこに子育てをする人たちが集まり、地域が活気づく。小学校で言えば、歩いて通える距離に学校があれば、道行く人、門前の家々の人たちが子どもたちを見守って下さる。大きな安心が得られる。そして非常災害時には、学校は何よりも人命を守る砦となる。学校と地域は相互に補完し合いつながりながら存在する。今後の学校・地域の有り様を考えるときに忘れてはならない視点だと思つた。

(東松島市・鳴瀬桜華小)

震災によって校舎が使用できなくなった小・中学校一覧

市町村	学校名	被災原因	H22 児童生徒数 (学級数)	H23 児童生徒数 (学級数)	H25.4月 仮設校舎・間借の状況	統廃合の状況	統合校名	H25 児童生徒数 (学級数)	(統合校)H22 児童生徒数 (学級数)	H22 H25 増減	
石巻市	門脇小	津波 火災	301(14)	218(12)	全学年門脇中学校舎間借	石巻小との統合検討中		157(8)		-144	
	湊小	津波	204(9)	155(8)	全学年住吉中学校舎間借	湊小との統合、被災した校舎に復帰 予定		127(7)		-77	
	湊二小	津波	236(10)	111(8)	全学年開北小敷地内仮設校舎	湊小と統合予定		93(7)		-143	
	渡波小	津波	453(16)	353(14)	全学年稲井中敷地内仮設校舎	被災校舎に復帰予定		234(11)		-219	
	大川小	津波	110(7)	26(6)	全学年飯野川一小学校舎間借			24(7)		-86	
	相川小	津波	72(7)	68(7)		25年3月末閉校、吉浜、橋浦と統合	北上小	*130(9)	橋浦小	94(8)	-84
	吉浜小	津波	48(6)	21(4)		25年3月末閉校、相川、橋浦と統合					
	谷川小	津波	14(3)	7(3)		23年3月末閉校、大原小に統合	大原小	27(4)			
	雄勝小	津波	108(7)	40(7)	全学年石巻北高飯野川校敷地 内仮設校舎	25年4月船越小を統合		36(6)		-94	
	船越小	津波	22(3)	14(3)		25年3月末閉校、雄勝小に統合	雄勝小			-88	
	湊中	津波	246(9)	215(7)	全学年中里小敷地内仮設校舎			158(7)			
	渡波中	津波	505(16)	409(13)	全学年稲井小敷地内仮設校舎			344(12)			
	雄勝中	津波	80(4)	51(4)	全学年石巻北高飯野川校舎間 借			32(3)		-48	
大川中	津波	58(3)	40(3)		25年3月末閉校、河北中と統合	河北中					
東松島市	浜市小	津波	168(8)	145(8)		25年3月末閉校、小野小と統合	鳴瀬桜華小	*257(15)	小野小 133 (7)	-44	
	野蒜小	津波	211(9)	157(9)	全学年民有地仮設校舎	27年度未閉校、宮戸小と統合予定		161(8)			
	鳴瀬二中	津波	158(9)	133(7)		25年3月末閉校、鳴瀬一中和統合	鳴瀬未来中	*264(13)	鳴瀬 一中 (6)	-49	
女川町	女川四小	津波	17(4)	6(4)		25年3月末閉校、一小二小四小で統合	女川小	*282(15)	女川町 3校 (25)	-191	
	女川二中	津波	11(4)	13(4)		25年3月末閉校、一中と統合	女川中	*203(8)	女川町 2校 (15)	-54	

はじめての新高校入試制度が

実施されて思う

高橋 智穂

希望のもてる

入試制度に

どこか違う

世界のよう

矢部 英寿

宮城県の新制度による高校入試は、私たちが臨むような復興が果たされていない2013年の3月に行われた。沿岸部の鉄道は復旧せず、沿岸部から内陸に仮住まいする家庭も多く、あるいは福島から移り住んでいる家庭も多い中、それでも新入試制度を導入することの意味が、どこか違う世界の論理の中で醸成されていたのだ。

もちろん、それまでの入試制度が良かったと言うことではない。しかし、なぜ今、地域を軽んじ競争を激しくする全県1学区なのか。なぜ今、自己責任のもと不合格者を増やす前期後期制なのかということなのだ。

震災後の混乱を解決するよりも、出願条件という数値（内申点）をはっきりさせて中学1年生から努力させること、そして基準に達

せず出願が叶わなかった時には自己責任として現実を受け入れる心の持ちようを作ることの方が大事だと言ふことなのか。

確かに新入試制度の導入によって、中学1年生から評定に対する中学生や保護者の見方が神経質になった。中学校は中学校で評定の基準やその取り扱いに神経質になった。

かつてのように「通信表というのは、その時期にどれだけ頑張ったか生徒をはげますもの。今回、悪いと思ったら次ががんばればよい。」と悠長には言えなくなった。「3は学習すべき内容をクリアしたということ。」とも簡単に言えない。「3」よりも「4」、「4」よりも「5」でないとだめなのだと親も子も思ってしまう。評定だけではない。部活動は3年間続けることや県大会出場が目的化してしまふ。親に生徒会活動を促される子どもも増えた。

新しい入試制度の実施によって、自分の将来に向けて興味・関心・適正をゆつくり探ったり、スポーツや文化活動を仲間と楽しむという目的はたてまえにならかねない。

（多賀城・多賀城中）

入試にかかわる進路指導をしていて以前から妙だと思っていたのは、生徒は入りたい高校を目指すのではなく、自分の力で入れる高校はどこかを探すことである。新入試制度はそれに拍車をかけた。前期選抜の「出願できる条件」を目を皿のようにして読み、ここだけなら出願できるのでと相談される。また、条件に合うような学校生活を送ろうと努力するあまり、役割欲しさに委員などに立候補する生徒が増加している。高校進学の本来あるべき姿はもうなくなりつつある。

生徒や保護者に見れば、少しでも早く進学先を決めたいし、前期選抜は「中学校長推薦」ではないから出願しやすいのとびくくのは当然だ。その結果、倍率は上がり多数の不合格者を出すこととなった。県教委は、後期選抜でフォローできると話すが、中学校現場での可否結果が出た後の苦労を知ってもらいたい。高倍率で合格するのは厳しいとわかっていても、不合格通知は中学生にとつては辛いものである。

出願の事務手続きにも新入試制度は課題が多い。前期選抜の「出願できる条件」が高校によつ



て捉え方に差があるため、確認が非常に煩雑である。曖昧な条件もあり、いかにも門戸が広いように受け取れるが、実際はほんの一部の成績優秀な生徒しか合格しないのである。不合格とわかりつつ出願するのは苦しい。そして、これだけの手続きが複雑になったために、出願事務のミスをしないうように神経をすり減らす中学校側の実情。

新入試制度は「受験の機会が3回（前期・後期・2次募集）ある」というが、それは受験生全員には当てはまらない。もし本当に機会を複数にするのなら、前期と後期を全員に受けさせるべきだと思う。もちろん条件などなして。そんなことは面倒でできないというのなら、公立高校の入試は、5教科の学力検査のみの入試を1回だけにすればどんなにスッキリすることか。

全ての子どもたちが明るい希望を持って、将来を見つめられるような入試制度となることを願っている。

（仙台・八乙女中）

中学3年生の 子どもたち

結城奈津子

はじめに

新入試制度になって2年目の今年、担任している3年生の子どもたちは、日々悩み、考えながら受験に向かおうとしている。

1. 前期選抜をねらう子ども

「先生！ ぼく、委員長をやります！」委員会で、クラスのT君が言った言葉。嬉しい気持ちで声をかけると、「委員長やると、前期選抜に有利ですよ？」と。そう、今の中学3年生の中には、前期選抜のために「何かをやる」とする子どもたちがいる。積極的にいいじゃないか、という声もあるだろうが、彼らには決定的に欠けているものがある。向上心だ。彼らがほしいのは「委員長」というラベルであり、評価だ。リーダーとして育てることが難しくなってきたな、と思う。

2. あきらめる子ども

何回言っても勉強しない子どもたちがいる。あるとき、ふと理由を聞いてみた。するとA君が「だってさ、俺、2年生の時に二つも1があつたんだ。もう無理でしょ。」なんとあつたらんと答えるのである。新入試制度では1年次からの評定が対象となることを、子どもたちは十分知っている。そして、だからこそあきらめてしまうのだ。「3年生で挽回すればいいじゃない。」という私の声には耳を貸さず、「無理だよ、無理。」と取り組もうとすらしない。彼は自分の将来をあきらめてしまっているのだろうか。

3. 私立高校を考える子ども

夏休み中に教育相談で、私立高校への進学を希望する家庭が増えた。もちろん、行きたい学科や部活動があつて希望する子どももいる。しかし、圧倒的に多いのは、「前期選抜は

無理だし、後期選抜で落ちたら……」という考えから、最初から私立高校への進学を考える家庭である。私立高校が悪いとは言わない。問題なのは、新入試制度によって公立高校に挑戦する気持ちは変化している、という現状である。家庭の都合で私立高校を選べない子どもたちはどうなるのだろうか。

おわりに

今の中学3年生は、私たちが思っている以上に新入試制度の影響を受けている。たった15年しか生きていない子どもたちが直面するにはまりにも高い壁なのである。そのことをもつと私たちが考えなければと思うのである。

（大崎・田尻中）

高校入試を終えて

一 保護者

我が子が前期入試を受験したいと口にした時、英国数が苦手な我が子には絶対に合格はできないと思い、不要に傷つくのをおそれ、私は反対しました。それでもどうしても言うので受験しましたが、結果は予想通りでした。受験を終えて思ったことは、私も子どもも、全く同じ意見で、前期試験は必要ないという



「子どもと読書」の今、これから

～ "大好きな一冊" との出会いのために～

とき 10月19日(土)
PM1:30~4:00

ところ フォレスト仙台 4F会議室
仙台市青葉区柏木 1-2-45
どなたでもご参加ください 参加無料



このフォーラムは「かくあるべき」からではなく、今、この時を生きている子どもたちの現実から、子どもが育つということや、子どもたちのくらしや学びを捉え直したいという願いから開催しています。

子どもの成長に関わる大人たちが、当の子どもたちとともに、子どもの今を語り合い、新たな「子どもの発見」を繰り返しつつ、その成長の良き伴走者になれると思います。

フォーラムはそのための、率直で自由な意見がかわされる「ひろば」となるよう願っています。

子どもの皆さん、最近まで子どもだった皆さんをはじめ、どなたでもお気軽にお集まりください。



【会場 最寄り駅】 地下鉄利用の方は、北四番丁駅
宮交・市バスの方は、堤通南宮町

話題提供 (予定)

- 家庭で、子どもと読書の今 (親子読書をすすめる会)
- 私の読書体験 (大学生)
- 今、学校図書館で子どもたちは (教師)
- 子どもの育ちと読書 (研究者)

誰かに読んでもらう「読書体験」の始まりから、自分で文字をたどり、書き言葉も身につけていくみちすじて、子どもたちは自分の世界をどのように広げているのでしょうか。

子どもたちの日々の生活の中で、読書はどのように位置づいているのでしょうか。どんな本と、どんなふうに出会っているのでしょうか。

子どもたちのゆたかな育ちを支えるために、子ども時代の読書の意味を話し合い、読書の楽しさや世界を広げるには何が必要か、ともに考えたいと思います。

どの子にも「大好きな一冊」との出会いがあるように願って！

ことです。

なぜなら不公平だからです。英国数が得意な子には有利ですが、うちの子のように理社が好きでその他が苦手な子には不利です。部活動もそうです。我が子は県大会に出場するのは非常に難しい強豪校がそろう部活に所属しておりましてので、結果、県大会に行くことはできませんでした。

これから受験する中学生の中には、県大会出場を考えて部活を選ぶという人も出てくるのではないのでしょうか？ 何の為の部活なのか？ 前期入試の条件を満たす為の部活にもなりかねません。

合格するのは難しいとわかっていた前期入試でしたが、それでも後期入試への気持ちの

切り換えには、二週間の時間を要してしまいました。前期の合格発表後、二週間、受験勉強が手に付かなかったのです。それだけ前期試験に賭けていたということでしょう。気が抜けたようになってしまい、かける言葉が見つからず、ただ自然治癒するのを見守るだけでした。さすがにこれには心配になりました。

五千人も不合格者を出した前期入試。前期入試で合格した子が、後期試験を受けたとして不合格になる子がいるのでしょうか？

そこまでして、前期入試で合格させる必要があるのでしょうか？

県教委はもつと当事者の声に耳を傾けてほしい。高校や中学の先生、保護者・生徒の声に。

新入試制度への疑問

佐藤 隆

何の為の誰の為の入試なのか？ 気付いて欲しい、新入試制度の弊害に。

今回の結果を踏まえて、一年でも早く、公平な入試制度に変わることを願ってやみません。

(太白区・高一生 観)

いろいろな問題があつて今回の入試になったわけだが、これまで10年以上にわたつて実施されてきた入試制度のどこに問題があつて、今回このような入試になったかという経過が、県民にはわかっていないと感じている。

このような入試制度になって思うことの一つは、今までの選抜方法は公平性があつたのか、公平な選抜が行われていたのかという点だ。また、新しく始まった入試についても、公平な選抜が行われているのか。透明性を言うなら、誰が見ても公平に行われているということを示す証明できなくてはいけないと思う。その公平性についてどうなのかという点が、一つ問題のタガと思つている。

二つ目は、今回の前期選抜ではペーパーテストを導入し、そのペーパーテストで学力を測るといふ選抜方法に重きを置くようになったが、果たしてペーパーテストに重きを置くことが妥当なのかどうか。そういう点も考えていく必要があると思つている。

(仙台・中学教師)

テストなし、競争なしでも「学力世界一」

くあらためてフィンランドの教育に学ぶ

清岡 修

2004年末に発表されたOECDの学力調査(PISA)で、日本の子どもたちの「学力低下」が大きく報じられました。それ以降、文科省による全国学力テストをはじめとして、「学力向上」の様々な取り組みがなされてきています。一方、「学力世界一」と注目されたフィンランドの教育は、今ではあまり語られなくなっており、もっぱら聞こえてくるのは学力テストの順位のことばかりで、「学力」競争が一段と激しくなってきました。

今回の講演は、改めてフィンランドの子育て教育のあり方に学びながら、これからの時代を生きていく子どもたちの学力と教育のあり方を考えたいと企画。講師には、すでにフィンランドを16回にわたって訪問し、子育て・教育について調査研究されている福田誠治(都留文科大学)さんをお願いしました。

講演の全体を通して大変印象的だったのは、今の日本の教育のあり方、そして私たちが日ごろ当たり前、あるいは常識と考えていることが、フィンランドでは決して常識ではないということでした。そのことについて、福田さんは授業の場面の様子や、子どもたちの様子をどう受けとめ、どう考えるのかなど具体的に、またユーモアたっぷりに話してくれました。

日本とフィンランドでは、教師の置かれている立場や労働条件、教育制度などずいぶん異なっていますし、すぐにフィンランド並みになるなどということはないかもしれません。とは言っても、目の前の子どもをどう受けとめ、どう向き合い、どう関わっていくのか、それらについては、私たちの生き方の問題として、ある

いは振る舞いや意識のあり方として、十分考えてみる必要があるように感じました。話を聞きながら、私も親としてちよつと痛いことを言われたなあ、反省しなくちゃと思わされること、しばしばでした。

また講演の中では、フィンランドの教育が一躍注目されることとなったPISAやTIMSSの国際学力調査の結果から見えてくることと言えることを、具体的なグラフや表を使いながら大変わかりやすく話して下さいました。

今回の講演内容については、現在冊子として発行する予定で準備しております。発行の際には、ぜひお読みください。以下は、講演を聞いての参加者の感想です。

◇◇◇

■フィンランドの教育というと「日本とは違ういいもの」といった漠然としたイメージしか持つておらず、今回具体的なフィンランドの教育の様子を知ることができて、とても参考になりました。私自身、大学で教育について学んでおります。大げさかもしれませんが、先生のお話を聞いて、教育観が変わりました。子どものやる気がおきるまで待つ。子どもの個性を伸ばす。など、教育の理想は常に理想であって、理想でしかなく、現状は違うというのが教育界の通説だと思っていたのですが、その理想を実践している国が実在しているということが衝撃でした。しかも成功している!



話は変わって、発達障害についてです。私は大学の講義の中で現在発達障害が問題になっていることを知りました。語弊があるかもしれませんが、どのような子が疑わしい子なのか、どうやって改善させるのかといったことばかりに日本では目が向けられています。しかし今日の話を聞いてみると、フィンランドではADHDなどに見なされてしまうような子どもの行動ばかりが目立ちます。日本と違うのは、教員たちが、そこまで問題とは思っていないことです。授業中に前時の粘土作りをしていても責めない、やめさせない。日本ではそのような行為は、問題行動とさえ言われてしまいます。問題化してしまう日本と、問題化しないフィンランドでは、何が違うのか。私が考えたのは教員の心の余裕の違い（差）ではないかということです。国民性や社会の違いはもちらんありますが。労働条件が、日本より格段によく、心に余裕のある教員は、多少の子どもの問題にも、大きな心の余裕で柔軟に受け止められるのではないかと。他の子どもと違う、自分の授業進行の邪魔になる……と、過敏に反応してしまう日本の教員だから、そういった子どもたちを発達障害というカテゴリーに入れて、自分の指導が至らなかつたからだという事実を直視しないで済むように、フタをしてしまったように見えます。

気にしなければ問題化されなかつた、問題化されなくても、そういう子どもにも適切な対応はできると思うのです。フィンランドのように。

（Iさん）

■福田先生のお話をうかがい、フィンランドと日本の学校のあり方にはこんなに大きな違いがあるのかと、衝撃を受けました。

北欧の国々の社会福祉面での断片的な話に触れることはあつても、学校の現場を知ることが、私の場合これまでありませんでした。福田先生のお話を聞きながら、日本の学校の先生と子どもたちの今を考え、ある意味でショックでした。

どちらが良くてどちらが良くないということではなく、フィンランドと日本の違いは、人間というものをどう捉えるかという点にあるような気がします。日本に住むものの一入として、そこに

もつと鋭く斬りこみ、自分なりに十分に考えを醗酵させなければだめだと思われました。（中略）フィンランドでは、子どもたちの人間性をまず第一に考えているように私には思えませんでした。このことはとてもしつくりくる考え方です。（中略）

福田先生の今回のご講演のレジュメの中に、OECDのシユライヒャー指標分析課長の説明として、「フィンランドをみると、権限と責任はすべて学校に与えられていて、学校がありとあらゆることを決めることができるようになっていきます」とあります。このことが学校の問題の唯一の正解ではないとしても、とても重要な軸の一つであることは間違いないでしょう。それに、学校を、まず最初にこのような環境に置くということはしごく当然なことだと私は思います。そして、その当然である環境が今の日本の学校にないとするれば、大急ぎで作ら出す努力をしなければいけないでしょう。

子どもの教育がどれほど大切かということは、学校のあり方がどれほど大切かということです。先生の働く条件がどれほど大切かということです。権限も責任も自由もない学校で授業をする先生を、子どもたちは心から信頼することができるとでしょうか。

（Sさん）

■高校3年、1年の子をもつ母です。このたび、地域コーディネーターのお手伝いをする事になり、何か情報があればという下心で参りました。しかし、図らずも今個人的に悩んでいた高3の子どもの進路についていろいろ考えることができ、大変ためになりました。

「勉強が嫌い」という息子ですが、先生がおっしゃったようにまさに「テストのための勉強」しか勉強ではないと思っていたということが、最近わかりハツとしたところでした。生きるための勉強を話してはいたつもりでしたが、うまく伝わっていませんでした。

学びあいについては地域コーディネーターとして参考になるものでした。

（Hさん）



PART IV

「部活」を語ろう、考えよう！

須藤道子

部活は子どもたちの生活と成長の中でどのような位置をしめ、どんな可能性と課題があるのだろうか。話題提供の皆さんの体験・経験をもとに、学生の皆さんをはじめ多様な立場から話し合うことができた。

折から、大阪・桜の宮高校の体罰事件もあつて部活のあり方が問われている。

社会的・制度的背景もあるとはいえ、指導者の資質や学校の姿勢の問題と捉えているだけでは本質的な解決になり得ない。フォーラムでは、問われているのは子どもへの向き合い方と、文化や余暇への私たち大人の捉え方、考え方なのだという問題提起が低奏通音となつて響きあつていたように思う。

(1) 話題提供の皆さんから(要旨)

— 部活の今を語る —

山田 理香さん(大学2年)

帰宅部 にしないで良かった
中学では知り合いの先輩への憧れから新体操部に。高校では中学と違うことをしたいと考え弓道部に。部活に入るべきか迷っている後輩がいたら、「是非入つて」と言えるかどうかを考えた。

新体操部では仲間の努力に触発された。人間関係の悩みも含め頑張りや苦労を周りはよく見ている、認めてくれることを経験した。最後までやり遂げたことで受験勉強などその先につながる力

も得た。努力は裏切らない。

弓道部では弓を引くのがこわくなくなつてしまふ状態が一年程続いたが、練習もして、精神的にも戦つてのり越えることができた。友だちや先生の励ましと支えが大きかった。

報われない口惜しさも体験、得たものはそれぞれにちがつても同じ目標に向かう仲間がいてこそ頑張れたし、楽しかった。

石井 宜さん(中学校教師:テニス部顧問)

子どもたちは部活大好き

テニス部顧問を通算22年、自身は競技経験はない。平日は授業準備、学年主任の仕事など殆ど練習を見られない状態で、土日、7月に休んだのは一日だけ。「教師残酷物語」のように、家族の理解もありテニス三昧の日々。

部員42名、コートは男女二面ずつしかない。県大会出場メンバーの練習が主になり、それ以外は簡易ネットでの練習

子ども達は部活が大好きで練習したいし、勝ちたい。自分たちでコートを探してくるし、練習のメニューも自主的に立てている。試合のときなど打ち方のアドバイスもするが、彼らはそうそうは受け入れない。

遠征の車出し、合宿など必ずしもレギュラーの親でなくても保護者の協力体制は固い。練習試合を沢山することで勝つ喜びにつながるし、経験させたい。部活を途中でやめる子はあまりなく、

今年是不登校で1名。一昨年、前任校では人間関係で1名。現在、一年生135名中、文化部は30名弱。

高橋 かおるさん(高校教師:文芸部顧問)
変わっていく生徒たちとともに

現在の勤務校小牛田農林高校には8年在籍。文芸部は自分が赴任してつくつた。

平日の放課後のみの緩やかな活動のあり方への疑問の声も聞こえるが、それでも、広く受け入れ、待つて待つて、少しずつの積み重なつてきていると思う。

対人関係のうまく取れない子どもたちだが、3・11のあと、東松島の大曲住宅でボランティア活動。400戸ぐらいを一軒一軒回つて句会のお誘いをした。何回か続けてきて、年配の方たちが楽しみにしてくれている。そういう中で、他の人も自然に話が出るようになっていく。

教室で一人ぼつんとしているが、俳句は天下一品、全日本コンクールでも入賞している生徒。その子が問題集を忘れてきて、隣の子に「見せて」と自分から話しかけてきたこと、二年生の時には一切入らなかつたプールに今年は入り出したことなど、周りも驚く変化を見せている。

俳句甲子園、昨年は全国から36チームが参加、決勝進出で宮城一高に2対1で勝つた。ぱつと見た相手の作品のどこが

動を見直していく必要がある。

※ 編集部注：神谷さんには「センター
つうしん」70号で「なぜ運動部活動で
『体罰』が起ころるか」で執筆いただき
ました。

(2) 話し合いから (抜粋)

—これからの部活を考えるために—

- ◎ 練習試合など結局親が送迎を余儀なくされる。そこまで親がかかわる必要があるのか。
- ◎ 勝てない部活、勝ち負けのない部活、競り勝ちたいと思わない子に楽しみはないのか。
- ◎ 部活には「差別」の温床があると思う。技術とか、どれだけ先輩にとりいることができるかとか。
- ◎ コーチにもよるが部活の教育的位置づけは疑問。コーチ至上主義はどうか？

い人が両方に出るのだが。大人がなんでも決めてしまうのでなく、時間はかかるが自分たちで考えてくことは大事。

- ◎ 部活指導があるから中・高校の教師になりたくない。専門性もないし、勉強する時間もないだろう。
- ◎ 教員の職務かどうかはかなりグレーゾーン。先生方に強制はできないが手当はつく。東京では土日は民間にという動きもある。部活でしか満たされない教育要求ってなんだろうとわからないまま、先生がかかわっているからと学校教育の一環としてある。各種全国大会が自治を奪うネットワークになっていないか。

- ◎ 部活を熱心に行っている子と、そうでない子の「学校」の存在の意味は違うのか—友だち関係が大きい、他にどういふことに楽しさを見つけているのかにもよる。
- ◎ 日本の競技はトーナメント。勝てば勝つほど日程がタイトになり、面倒な「自治」より試合に集中させたい、したいとなりがち。

- ◎ 勝つことと道徳教育を除いたら何のために学校に部活があるのか。安易に学校で引き受けないで地域に移行できないのか。
- ◎ 教育課程にないものに教師が責任を持つのは本来おかしい。放課後の自由な活動を認めて安全確保しつつ子どもたちの主体的自主的活動をどう

保障していくのが課題。

- ◎ 部活も教師の多忙の問題の大きな要素だが、地域でという基盤が乏しい中、部活がなかつたら子どもたちはどこに行けばよいのだろうか。

(3) 話し合いから思うこと

フォーラムではこれまで「友たち」「成績」「子ども時代」をテーマに語り合ってきたが、どれもそれ一つの問題として語り合えない広くて深いテーマだった。

今回の部活も余暇や文化の問題までからみ、子どもたちの日々を多面的に考えていくための具体的で身近なテーマであると感した。

終了後の事務局会議では、話題提供のお二人の先生の部活にかける熱い思いが話題になった。指導の自由があつて、子どもたちとつながり、一人ひとりを生かせる営みになつていく。逆説的ではあるが、どの子も参加する授業という場もそういう方向に転換していかなければと話し合った。

一方、宮教組の調査では7割の教師が部活を負担に感じているという。現状ではそうだろうと思う。では、その困難を解消する条件整備がなされれば「部活は社会教育に」という方向性は否定されるのだろうか。それは、学校とはどんな場であるべきなのかという問いとともに考え合っていきたいテーマである。

(事務局 フォーラム担当)

いいのか語る力、理解する力が求められるが、頑張つて発言していく。そういう体験の積み重ねの中で自分というものを成長させている。進路はAV女優か吉本かといっていた子が自分の作品をどんどん認められていくなかで、東北工科大学大文芸学部に入學した。とてもうれしい。

神谷 拓さん (宮城教育大)

歴史的・制度的背景から部活動を見る
体罰は「指導方法」の問題ではなく、「教育内容」の問題ではないのか。

大阪・桜の宮高校の体罰事件で顧問は「叩くことで子どもは必ず変わる」という確固たる気持ちがあつたと述べている。「心」とか「精神」とか、つまり道徳教育とつながつて、体罰を是認する実態が歴史的に継承されてきてしまつていふ。また、「勝つことだけが目的でない」といふながら、入試の要件になつたり、スポーツ推薦が存在したりのダブルスタンダードの教育制度を変えていかなければいけない。

生徒を集められない高校は統廃合の対象とされる中で、特色ある学校づくりのために「あの先生がいないと」となりがち。学校づくりに「貢献」している中で、体罰があつてもあまり責任追及もできない。

もともとスポーツとは「余暇・自発的な遊び」をさし、クラブは「自治」の場を意味するのであり、その観点から部活

- ◎ 自分たちで団体戦5人、個人戦4人のメンバーを選出した。他の学校は強

- ◎ 試合や展覧会は自己表現と交流の場。他者とおりが合い多面的発達を遂げていく。
- ◎ 恐いのは勝利至上主義に陥いること。強くなればなるほど指導者に絶対服従となる。

小中高とろくな先生に出会わなかった。ほとんど覚えていない。

私は、「宿題は自分のためにするものだ」などとうそぶく有象無象どもに対して、完璧にやった夏休みの宿題を一切提出せず、これ見よがしに教室の机に放置して帰ったりする生徒だった。

当然、大学受験期も毎日飽きもせず雀荘に入り浸っていた。試験当日など徹夜明けで会場に向かったため、雀荘に筆箱を置き忘れて大変焦ったことしか覚えていない。

しかし、そんなことではいけないと思い、大学に入ってから麻雀を一切断ち勉強に専念した。朝は毎日4時に起きて新聞を配り、9時には学校に行き、20時くらいまで勉強した。授業はさほど楽しくなかったので図書館に籠るようになるのに時間には掛からなかった。

当時の私は、持ち前の貧乏性からか「これからの人生を最大限無駄なく有意義に過ごさねばならない。ゆえに必然的に導き出され



た結論以外は無意味である」という良くわからない半ば強迫観念のような考えに取り憑かれ、正しいとは何なのかをずっと考えていた。

友人と無為の時間を過ごそうなどとは少しも考えず、サークルもバイトもせず、来る日も来る日もマルクスや戦後民主主義者と呼ばれた人たちの結論ばかり読んでい

わたしの出会った先生 4

柴田平三郎教授

た。図書館で本棚を整理している時間が楽しかった。

2年生になり、どこかのゼミに所属しなくてはならなくなった私は適当に政治学のゼミを取った。そしてそこで一人の先生に出会った。中世政治思想の権威で名を柴田平三郎という。先生はタケカワユキヒデと古畑任三郎を足して二で割ったような顔をしていた。身

なりにこだわらず、専門や実務を軽蔑する反面、役に立たないものを礼賛し、口を開けば古典を読めと言っていた。

私は、中世には何の興味もなかったが、彼のどこか大正教養主義を受け継ぐリベラルな姿勢は嫌いではなかった。反面、イギリス的で保守的なところは好きになれな

前谷津 剛



かった。

私は思いっきり振り回しても壊れないおもちゃを見つけたような感じで、先生を捕まえては議論をふっかけた。マルクスにかぶれ、大上段に構えた生意気な私にも彼は実に寛容だった。学生よりも教授と仲の良かった私は一番可愛がられていたと思う。3、4年時はゼミ長になり何度も飲み连接到行

ってもらった。特に憲法の古関彰一教授とはよく飲んだ。3人で今はなき上野聚楽で飲んだのもいい思い出である。

卒業式も呼吸するようにスルーしたが、式が終わったのを見計らっていたものように研究室に行ったら先生に「あんな無意味な式など行きませんでしたよ」と得意気に報告すると、彼は穏やかに「人生は形式だよ」と返した。

これはかつて丸山真男が、壘行を繰り返す全共闘学生に対して凜然と言いつつとされる言葉で私もそれは知っていたが、そう言われても何が言いたいのかわからなかった。当時は生意気な学生を煙に巻きたかったんだろうくらいにしか思っていないかったが、不思議なことになぜかここ数年、まるで呪いでも掛けられたかのよう

に、何かの節目が来ると折に触れてこの言葉が浮かぶことが多くなった。もしかしたら人生は形式なのかもしれない。

(宮教組 書記)

ああ！ 1年生？

あ～あ 1年生？

藤原 聡

今年、三度目の1年生の担任となりました。過去二度の1年生担任のことを思い出しながら、「よし、元気に楽しくがんばっていきましょう」と意気込んで迎えた4月でした。しかし、前回は12年前。学校を取り巻く様々な状況の変化もあり、前回の経験を生かして…とはなかなかいかず、四苦八苦、五里霧中……、ドタバタしっぱなしの毎日です。

◇ 入学前からドタバタ。「2クラスか？ 3クラスか？ 結局……」

3月末の時点で、入学予定児童数は70名。あと一人増えると3クラス！ そこで、学級編成は2クラスと3クラスの二バージョンを用意。教室の配置も3クラスになった場合を想定し、2年生を2階から3階に移動させるなど、春休み中の新学期準備は大忙しでした。しかし、「3クラスになれ！」という祈りも空しく70名のまま入学式当日を迎えました。すると、入学式直前に1名が転出していたことが判明。なぜその情報が市教委にも学校にも伝わらなかった？ 予めわかっていれば、3クラスバージョンの準備は不要だったし、気をもむこともなかったのにいく。小さくないショックを抱きながら、69名での新学期スタートとなりました。

◇ 「ザ、寄り道・道草」

入学して2週目のある日のことでした。下校後1時間。Rくんのお母さんから「うちの子がまだ帰ってこない」という連絡が入りました。その日はお母さんが家にいるということ、学童保育に行かずまっすぐ家に帰ることになっていたといいます。これは一大事と、先生方で手分けして捜索に出かけました。すると、途中までHくんと一緒にいたという有力な情報をゲット。しかし、そのHくんの家はRくんの家とは全く別の方向で、学区の一番東端のかなり遠いところ。「そんなところまで行くか？」とは思ったものの、とにかく行ってみよう。とHくんの家に向かいました。すると、Hくんの家の隣の空き地にランドセルと黄色い帽子を発見。名前は？ ビンゴ！ 確信を胸にHくんの家を訪ねると、いました。



二人で楽しくゲームをして遊んでいるではありませんか。Hくん在家で遊ぼうと誘われたRくん。「行くー」と、二つ返事でそこに直行したそうです。Rくんを家まで送っていったときお母さん曰く「絶対に戻らなかつたよ！ と釘を刺しておいたのですが……」おいしい。二人とも、頼むよ。

◇ 給食中、教室を空けたその間に……

1年生で大変なことの一つに「給食」があります。決して長くない時間の中で、準備、配膳、食事、片付けを行わねばなりません。34人と人数が多いのでなおさらのこと。でも、幸いなことに仕事が大好きな子どもたち。給食当番になると皆張り切って行い、片付けもかなり上手にできるようになりました。それで、食事



中用事があつて教室を5分ほど空けて戻つてくると、Sちゃんがおもらししていたのです。それも二度。私がいなかったから「トイレに行つてきます」と言えなかった？ どうしていいかわからなかった？ どうして？ 本人に聞いてもよくわからずじまい。ん〜??

◇ 友だちと一緒に帰りたい

9月のある日、さよならをして15分ぐらい経つた頃、1の1の先生曰く「Sくんが荷物を持ったまま児童玄関に立っているから、おや？」と思つて話を聞いてみたのね。そしたら『Rくんと一緒に帰ろうというから待つてる』つて言うのよ。でも、Rくんて学童保育だよね？」確かにそうだ。学童に行く、いた！ それも楽しいおやつの中。話を聞くと、今日は3時半まで学童で、その後自分で帰ることになつていから、それまで待つてつてと言つたそう。すぐにSくんの所へ行き「いくらSくんと一緒に帰りたいからつて、30分以上待たせておいて、自分はおやつを食べているのはおかしいでしょう。」と指導。Sくんには「お母さんも心配するし、待たなくてはいけないんだつたら断つていいのだ」ということを話しました。二人とも、分かつてくれたかなあ？

今年の2月、利府の生協で、前任校で1、2年と担任した女の子と偶然再会。利府高3年生で、大学進学も決まつているとのことでした。その成長した姿を見て、当時の天真爛漫でちよつと太めだったその子の姿を重ね合わせ「立派になつたなあ。素敵になつたなあ。」と感激に浸つた私でした。そうです。1年生の子どもたちには無限の可能性があるのでした。そのことを忘れずに、もつと長い目で、穏やかな心で、子どもたちと向き合つていかなければなあ、この文章を書いて改めて思ひ至つたのでした。ん、まだまだ修行が足りないなあ。





『人間づくりの学級記録』

(宮崎典男 著)

の読み合いを終えて

佐々木 敦

宮崎典男さんは、主に国語教育の分野において大きな足跡を残した実践家・理論家である。今回、みやぎ教育文化センターで行われた宮崎さんの『人間づくりの学級記録』を読み合う集まりに参加する機会をいただいた。そこから私なりに見えてきた宮崎さんの実践について記させていたたく。

1 宮崎典男さんのこと

読み合いに先立ち、センターの春日さんから宮崎さんのことについて語っていただいた。宮崎さんは、1915年(大正4年)生まれ。戦前から教師になり宮城県や福島県で教鞭を執った。最初の赴任地は、生まれ故郷でもある白石市の斎川小学校であった。

その後、栗原郡姫松小学校の菊池譲校長を慕って同校に転任した。戦後、宮城県教育研究所に勤務。そこでいわゆるレットページに遭い、退職を余儀なくされる。退職後、宮城県学校生活協同組合の嘱託となった。宮崎さんを何とか教室へ戻そうとする人々の努力に

よって、福島県で働けるようになり、福島県福島市土湯小学校に勤務することになった。この学校での実践が『人間づくりの学級記録』に記録されている。

舞台となった土湯は、当時温泉街の人々と開拓民とが混在する学区であったようだ。宮崎さんは、ここに一人で赴任した。最初は一人で行ったのだが、しばらくして奥さんと子どもを呼んだのだ。その後、宮城県の教員に復帰し、船岡小学校で退職する。退職後は、すばる教育研究所の副所長や宮城教育大学の講師を務める傍ら、精力的に論文等の執筆活動を続けた。主な著作だけでも、『文学作品の読み方指導』『教師そこまでの道』『人間づくりの学級記録』等がある。

春日さんによると、宮崎さんはとにかくまじめに書く人だったそうだ。当時、パソコンはない。鉄筆で書いた時代だった。授業や学級の記録等、毎日こまめに記録をつけていた。『三等車』の授業記録をとった宮崎さんのノートを、春日さんに見せてもらった。細かい独特

な字でびっしりと記録が残されていた。子どもが感想を書いた紙も丁寧に貼られていた。

2 「学級集団」

さて、『人間づくりの学級記録』の読み合いだが、この中の『学級集団』の章を行った。この章は、宮崎さんが担任した3・4年生の複式学級が4月にスタートしてからの折々の出来事が記録されている。子どもたちや宮崎さんの生の声が記録されていて、宮崎学級の様子がよく分かる章である。

3 「話し合いを、話しあう」

宮崎学級は、クラス会(今で言う学級会)を頻繁に行っていたようだ。クラス会での話し合いの様子がこの章だけで5回紹介されている。配給された机をどう使うかに始まり、学級の『ボス』の摘発にまで発展していった。学級を変革していく主体者として子どもたちの意識を高め、それを実践するところまでもっていつているのが見事である。それは、偶

然の産物ではなく、宮崎さんの日常の学級づくりが必然的にそうさせたのである。4月当初宮崎さんは、「かしまっている三年生が、いつになったら、上級生という権威に抗して、自己を主張するようになるのでしょうか?」「四年生は、いつになったら、その特権の衣をぬぎ、平等と、自由、人格の尊厳という意識にめざめ、三年生をも、おなじ生活の仲間として、尊重するようになるのでしょうか?」と思悩む。ここから彼の学級づくりの方針が読み取れる。

その具体化を図るため、宮崎さんは、クラス会で問題を話し合うだけにとどまらず、「話しあいを、話しあう」実践を展開している。

「話しあいを、話しあう」とは、クラス会で話し合われた記録を子どもたちに読ませ、もう一度振り返らせるのである。例えば、配給された机をどう使うか話し合いをしたクラス会の後では、話し合いの記録をプリントしたものを子どもたちと読みながら、

(1) 机のわけかたは、これでよかつたのだろうか。

(2) このクラス会で、よかつたところ。よくなかつたところは、どんなところだろう。

(3) 自分は、どこで、どんな発言をすればよかつただろうか。と観点を示して子どもたちと考え合っている。

宮崎さんは、「話しあいには、話しあいの限界があります。」と述べ、「話しあいは、その時の感情、自己の立場にとらわれることが多いし、たしかに認識を基礎にしない発言や、

群衆心理に支配されることもある。話しあいを文章に表現すれば、それらの点が明確に指摘でき、話しあいの欠陥がはつきりしてくるし、自己の話し合いへの参加の姿勢もはつきりしてくる。」としている。

このような丁寧な実践が、宮崎学級の子どもたちの論理的思考力をはぐくみ、学級を革新していく主体者として子どもたちの意識を高めていったのであろう。

4 保護者とつながる

クラス会の記録の2つめは、「遠足のこづかい」についてである。決められた金額をオーバーしてもってきた件について話し合っている。個人名を出しての話し合いだが、その記録をプリントして家庭にまで配布している。クラス会の話し合いを丸ごと保護者に知らせることで、宮崎学級のクラス会の雰囲気は、

「親との結びつきを深めるということもいわれていますが、その第一歩は、日々の教室において、子どもたちが何を考え、どう生活しているかという事実を提供することにあつたのではないのでしょうか。」と述べている。

最初、「遠足のこづかい」についての実践を読んだときは、昔だからできたことで、今実践するのは難しいと感じた。しかし、千葉さんや参加したみなさんの話を聞き、さらに宮崎さんの前述したことを読み直し、「個人情報保護」ということで思考停止になつて自分の発見した。保護者は、子どもたちが教室で生活している事実を知りたいのである。

(個人名を出すことには慎重にならねばならないが)それが、宮崎実践のように前向きな雰囲気にあふれていれば、最高であろう。

5 人間の見方

「遠足のこづかい」では、クラス会の後、規律違反をした子の母親からの手紙をもとに、「話しあいを、話しあう」を行っている。ここでは、規律違反をした事実のみでその子を責めるのではなく、その子の家庭の事情を考えて子どもたちは話し合いを行っていた。

人間を表面に現れた事実のみで見るとなぐ、隠れた事実にも目を向け複眼的に見る目が子どもたちに芽生えているのを感じる。それは、千葉さんが述べられていたが、詩や作文を書かせる事などを通して、事実をしっかりと見つめさせて、日常的に論理的思考力を鍛えている基盤があるからなのであろう。

6 最後に

思いつくままに読み合いを終えて感じたことを書いてきた。参加の方々からは、いろいろな角度からのお話を聞かせていただき、感心することばかりであった。しかし、私の中で昇華できず貴重なお話を紹介できなかったのが悔やまれる。

今回、宮崎さんの仕事のほんの一端に触れただけだが、示唆に富んだ実践に出会うことができた。

(名取市・下増田小)

センターの動き

- （6月）
28日 事務局会議 通信発送
（7月）
1日 三上満さんに連絡がとれ、高校生への公開授業1月12日に決定。
2日 ホームページについて の打ち合わせ。国語実践書編集会議。
9日 戦後教育実践書を読む会の本年第1回の佐々木敦さんに連絡。
10日 三上満さんに正式の依頼状を発送。
11日 福田誠治さんから、礼

▼本の紹介▼ 宮城の教室でつくられた

『文学作品の読みの授業』

編集 宮城国語の授業研究会

今は休刊となっている「教育文化」（宮教組発行）、「カマラード」（宮城民教育連発行）、「よみかた東北」（よみかた指導東北研究会発行）の3誌に掲載された文学作品の読みの授業を主として編集されたもの。

報告の仕方は実践者によってさまざまであるが、それだけに、「授業づくりはどうすればいいか」「授業で大切にすることは何か」など誰もがあつていない、それぞれの実践が共に考えてくれそうに思います。

取り上げられている作品は、「くじらぐも」「おおきなかぶ」「ろくべえまつてろよ」「スイミー」「お手紙」「かさこじぞう」「スーホの白い馬」「名前を見てちょうだい」「子ウシの話」「少年と子タヌキ」「えんびつびな」「はな」「サーカスのライオン」「手ぶくろを買いに」「モチモチの木」「こんぎつね」「一つの花」「夕鶴」「世界一美しいほくの村」「太郎コオロギ」「たかの巣取り」「大造じいさんとがん」「ヒロシマのうた」「海のいのち」「冬のかい」「あしたの風」「ほくのお姉さん」「坂道」。

以上の中で教科書にない作品は付録として全文が紹介されています。

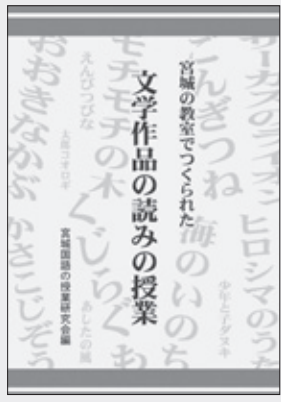
頒価 1000円（税込）

（B5版 272ページ）

発行 きた出版

TEL 022-791-2021 Fax 022-791-2022

* 問い合わせは「みやぎ教育文化研究所センター」でも受けます。



状への返事がくる。自分の教育への考えを述べており、厳しさを承知したうえで、教育問題に向き合う姿勢は刺激的である。12日 事務局会議 臨床教育学会との共催の件について話し合う。次回のフォーラムのテーマとして須藤

- さんから「子どもと読書」が提案。夜、若い教師の学びの会例会。
13日 フォーラム「部活」。話題提供は4人。なかなかおもしろく、それぞれがしっかりと課題をもつて話さう。
18日 3時、堀尾瞬久さん来室。野々垣さんから三島さん聞き取りのこれからについて電話。
19日 つうしん72号を考え始める。別冊は若い人向けの内容を意図的に入れようと思ふ。
22日 午後、ヤスパース読書会。清岡さん、福田講演記録のテープ起こしを完了、読み始める。
23日 3時から震災についての話し合い例会。
24日 つうしん72号素案の検討。福田さんの原稿読み終える。多くの人に読んでほしいと思う。高校入試について、よその制度を調べたいので、各研究所にその依頼をすべく準備にかかる。
25日 国語実践集完成。編集委員集まる。
26日 事務局会議 通信72号企画についていろいろな考えが出る。福田講演ブックレットはつくることで一致。
29日 福田誠治さんに講演記録のブックレット作成許可をメールで依頼。夕方、快諾をいただく。

- （8月）
2日 仙教組との共催、スイミー講座。各地の研究所に、高校入試制度の資料依頼書を送る。通信72号の原稿依頼書も発送。
3日 戦後教育実践書を読む会。今年度第1回。参加者は多くならず。宮崎さんの「人間づくりの学級記録」がテキキスト。案内人は佐々木敦さん。
5日 入試制度の例会。臨時運営委員会の案内を発送。
19日 別冊の一部の原稿校正など。
20日 昨夜から雨が降り続く。運営委員会のレジメ作り。福田講演記録の読み合わせを2人でやる。少しでも急ぎたい。
22日 明日のレジメと資料づくり。運営委員会用は、臨床教育学会の趣意書・田中孝彦さんから共催を考る理由のメールのコピー・第2回大会の要項の内容を。
23日 事務局会、運営委員会は、共催については全員の賛成を得る。本田さんから、教材研とのことで二つの話がでているということが話される。「小学校での外国語教育について」の講演会が提案。1月から2月にもつことにする。
27日 10時から入試制度についての世話人会。
29日 72号用教育遺産の原稿校正。

- （9月）
2日 臨床教育学会研究会大会について教育会館と話し合う。基本的に問題なし。仙台S小から、国語14冊の申し込み。びつくりする。
4日 大槻邦敏さんから「国語の実践書を全部読んだが、とてもよかった」との電話をもらう。すぐ礼のハガキを書く。
5日 真山さんから原稿届く。どのように乗り越えていくかという観点からおもしろい。別冊、もう一本は、子どもの文が入った方がいいと思う。カマラードからとることにする。通信全体打ち合わせ。別冊はそろえた。
9日 入試問題世話人会。午後ヤスパース読書会。
10日 鎌田さん、吉長さんから原稿入る。別冊2校が入り、校正始める。
11日 渡辺さんから入稿。特集タイトルを変え、まえがきをつけ送る。別冊校正終了。英語教育についての講演依頼の手紙を書く。
12日 明日の事務局会議のレジメづくり。
13日 事務局会議 フォーラム「読書」は須藤さんの提案について話題提供者を工夫することという注文が出る。
14・15日 愛媛・大三島に三島宇滋雄の父親仙洞和尚の寺大通寺を訪ねる。